

ねりいろトンネルエフエクティア

七津八

くるくる。ざぶん。

流れ、流されていく。

「流れるまま、濁流のまま。」

「時とともにあの場所はおさかる。みるみるうちに。」

あの場所。咲く場所。

約束はしていないけど。

流れ、流される。

濁流のまま。いかだのうえ。

女の子がひとり。

ふたりきり。彼女はカメラをかかえている。

いかだのうえ。

くるくる。ざぶん。

ぼくはダンゴムシ。

いえす、ダンゴムシ。ただの。

泳げない。いかだのうえ。川の中。

約束はしていないけれど。

あの場所から、とおざかってしまう。

あの場所。咲く場所。

いかなくちや。

でも、ぼくはダンゴムシ。なにをしているの？

泳げない。

川がこわくて。濁流がこわくて。

いかだのうえ。木の葉と同じ。

くるくる。くるくる。

どこへ流れつくのだろう。対岸もまだとおい。

カメラの女の子、シャッターを切った。

カシユ

「……なに撮ったの？」

「アオニサイにはおしえなアーい」

「ええー……」

しんらつだった。しんらつすぎて泣けてきた。ダンゴム

シとしてはぼくはわりと中年なのだが。

けれど、女の子のくちびるはさつきから動いていない。
なにかがちがう。

彼女はおもむろに、持っているカメラをかかげてみせた。
くもり空の下で、フレームのかどがにび色にひかる。ボ
ディはレモンみたいなあかるい色。

「うちの子で気をまぎらわせないでサア、この状況をシ
ンシに受け止めるほうが先じゃナイノオ？」

と、カメラがいった。「もつと必死になるのヨウー」と、
またカメラから声が出た。ぼくは、カメラにしかられてい
るらしい。理不尽だ。それ以前に不可解だった。ショック
で脱皮しそうだ。

「か、かめらが……」

「ああつとおーっ！ カメラがしゃべっていることにはツツ
コませないわよオー？ あたしはカメラ。ただのカメラ。
デジタルだけどポラロイド仕様のハイカラおもちゃ。でも
おもちゃだって夜中はしゃべり倒しててでしょ？ あたし
は昼間でもしゃべるの。わるい？ ハイわるくなアーイ！」

「えええー……」

なんだかものすごいいきおいでぼくの抗議はふうじこめ

られてしまった。女の子の両手にぴったりおさまるサイズ
のくせして、このカメラは川のはげしい流れの音にも負け
ない声でしゃべる。しかも早口でとてもパワフルだ。ひと
ことというと、こわい。

「……ウコン」

川の音とカメラのさわぐ声のすきまにべつの声。

小さな声だったけれど、空気の中をなめらかに流れて、
耳のおくのおくの心のおくまであぶなげなく着地するみた
いな声。

女の子がじつとぼくを見ていた。

「ウコン……カメラの名前？」

コクリとうなずかれる。彼女の手元でカメラが得意げに
鼻を鳴らすみたいな音を出した。そのレンズと同じように
まっ黒なひとみがぼくを映す。少しだけむらさきがかった
ふしぎなひとみ。髪の色も、白みがかったオレンジみたい
なふしぎな色。ぼくはダンゴムシだけれど、彼女がずいぶ
んと変わったニンゲンであるということには最初から気づ
いていた。そもそもダンゴムシと同じスケールという時点
で、本当にニンゲンかどうかもうたがわしい。しかし、じ

やあ彼女はなんだろう。すごく擬態が得意なナナフシ？
ナナフシがしゃべるカメラを持つかな？

「じゃ、じゃあ、きみの名ま……うわつと!？」

いかだが急にはねてスピードを落とした。ひときわ強い波にほうりなげられたぼくらは必死でいかだにしがみつくと、水面にたたきつけられたときがいちばんあぶなかった。いかだがふたたび流れにのるまで、かろうじてぼくらはたえ切った。いかだがくずれたり、まるごとひっくり返されたりしなかったのが幸いだった。

「ホラーッ、そのダンゴムシー！ 浸水して保障外認定されなくなったら、とっとと策を考えなさいよおー！」

カメラがぼくに向かってギャーギャーとさわぎたてる。半分くらいどういう意味かわからなかったけれど、ぼくがこの状況を打開しようとしていないせいで、腹をたてていることだけはまちがいがなかった。そりゃあ、ぼくだって希望が見えるならなんとかして岸にもどろうとするだろうけれど、飛べもしなければ泳げもしない、節足動物の中でもことのほか陸棲に特化してしまったぼくらのような種族なんかにいったいなができるっていうのか。

なにもできないことをぼくがなげいていないわけではなかった。あきらめて卑屈になるつもりもない。けれど、こう八方ふさがりのところへ理不尽になじられてしまうと、自分の無力さを手加減なく思い知って、親戚のワラジムシくんくらいぺちゃんこになっていくような心地がする。

実際、ぼくはいかだのうえでうなだれて、甲殻のふちが全部丸太についてしまったのだけれど、そのときまた、あのかわいた音がした。あたまをあげてみると、女の子が白くてきれいなま四角の、葉っぱではないとてもうすいものを手に持って、自分の顔と同じ高さでそれをまじまじと見つめていた。そうだ、ウコンという名前がついてるらしい彼女のしゃべるカメラは、デジタルだけれどポラロイド風の、トイカメラだった。おもちゃだからか、フィルムが「ンベェー」と自動ではき出されてくるしかけはなしらしく、ウコンさんの裏がわのカバーがぱっかりひらいている。女の子はさつき撮った写真をそこからとり出して、しだいに現像されていくようすを観察しているみたいだった。というかすごくおちついてる。さつきいかだがはげしくはねたにもかかわらず、彼女はまるでケロリとしていた。

「オー、ネリちゃん、またきれいに撮れたねー。ダンゴムシのおじさんにも見せてあげなよ？　せつかく背景やつてくれたんだし」

「なぜすなおに被写体といわれなのか……」

「ネリちゃんネリちゃん、ほら、タイトルは？」

「『ダンゴムシなのにウジウジムシとはこれいかに』』

「ひどっ!?　えっ、うそ、ひどい！　そのカメラにしてこのカメラマンありだつたなんて！」

「つてウコンがいつてる」

「〜♪」

「カメラがくちぶえふいてる!?　じゃなくて！　こ、こんな小さな子に、なんてこといわせるんだ！」

「ああん？　うちの教育方針に外から文句いわないでくださいるウ？　ねえ、ちよつとオー、ウコンたん、モンペっちやうゾー？☆」

「カメラの妖怪はじゅうぶんモンスターですッ」

おやごさん
ペアレントではないでしょ、ともいっておきたかったけれどがまんした。どうにもウコンさんは保護者づらがした
いようだぞと、言葉じりからじゅうぶん察しがついていた。

きつとふみこめば、より面倒くさいことになる。

それに、なんとなく、ふたりはいつもいっしょにいるよ
うな気もした。それこそ、おやこみたいに。

ああ、そうそう。ネリ、というらしい。くしくもウコン
さんの暴言のうちから、女の子の名まえを知ってしまった。

ネリちゃん。ふしぎな子だと思う。ニンゲンに見えるの
にぼくと同じスケールなのもふしぎだけれど、もつとなん
だか、飛び抜けてる気がする。

すぐくおとなしそうに見えるけれど、元気がないように
は見えない。とても活発そうには見えないけれど、なぜか
いきいきとした雰囲気にかまれている。表情にとぼしい
つていうのか、なにを考えているのかよくわからないのもふ
しぎなところ。

あべこべのふしぎ。あいまいなふしぎ。

ふしぎという名まえの物体が、その小さな体の中と心のおくまで、ぎゅうぎゅういっばいにつまっているような感
じがする。

ふしぎそのもので、だからきつと、ふくぎつな子なんだ
ろう。

だけど、だからむずかしそうだとか、腰がひけてしまうような感じは全然しない。むしろ、ふしぎと吸い寄せられるみたいだ。ひよこひよこゆれる小さなポニーテールの先端を、気づけば目で追いかけている。ふしぎなことに。

彼女なんかとくらべたら、ぼくの子どもはずいぶん単純で、わかりやすいのだろう。親としてはそのほうが安心で、けれどほんの少しの落胆もないといえぼうそになる。それに、時と場合によっては直情的なほうがやっかいだったりするものだ。

いつしか川の流れがゆるやかになり、いかだが安定してきていた。背の高い草のアーチがほどけて、灰色の雲がはつきり見える。はばを大きくひろげた黒い川の、ちょうどまん中をぼくらは通っていた。それに気がついたウコンさんが、「アチャー」と高い声でうめく。

「こりや本格的に岸がとおいわ。ネリちやあん、これ、このまま海までいっちゃうカモヨ？」

「海……」

なにもこたえない少女の代わりのようにぼくがつぶやいていた。海に出たら、さらに沖合へ流されて、陸へもどる

のぞみは絶たれるだろう。それまでになんとかしなくてはいけない。絶たれるのぞみがそもそもあるわけではなかったけれど、まだ陸が見えるところにあるうちは、あせつたりなやんだりすることができた。

「まーもしようがないかー。ウジダンゴムシさんは最初からかえりたくないみたいだしー」

「ちよ、ちよっと！ ぼくはまだ一度もあきらめてなんかいませんよ！ 最初からってなんですか、最初からって！」

「カエリタイ？」

みように不安定な抑揚で問い返され、ぼくの声はのどにつつかえた。どうしてそうなったのかはわからない。たずねてきたネリちゃんの顔が、まっすぐにこつちを向いていたからなのか。くもりひとつない彼女のふたつのレンズには、いっぴきのダンゴムシが大写しになっている。

「そ、そりやあ……」ぼくは自分がどまることにもとまどい覚えながらこたえた。「ぼくはダンゴムシで、ダンゴムシは陸のいきものだから、今にも水に落っこちそうなこの状況ですつといたっていうほうがおかしいだろう？ できれば早く地面にもどりたいし、それに……」

それに、いかにくちやいけない場所がある。

あの場所。小さな花の咲く場所。

いおうとして、でも、いいよどむ。

いかにくちやいけない。

どうして？

たしか、約束はしていなかった。

それでもいかにくちやいけない。

どうして？

いいよどむ。いかにくちやいけないのはわかっている。

それなのに。

どうして、こんなに足がすくむんだろう？

「そんなに地面をはいつくばっているのが好きなら、ムシにでもなれば？」

「ひどっ！」と、またネリちゃんにいわれてぼくは飛びあがった。「な、な、なんてひどいことを……え？ いや、もうすでにムシなんだけど、あれ？ じゃあべつにバカにされてない？ それとも、ムシであることそのものをバカにされてるの？」

「ってウコンがいつてる」

「でもウコンちゃんにもそんなテツガクテキなことわっかんナアーイツ★」

「悪意はたつぷりじゃないですか！ その黒い★はなんなんですか!? さっきの白い☆とどんな使い分けがあるっていうんですか！ なんでぼくにはそんなものが視えてるんだ!?」

なにかえたいのしれない次元の外にありそうな引力のようなものにおののきだしたぼくを見て、ケタケタ笑うウコンさん。どうやら本当にまた彼女がネリちゃんをけしかけたらしい。それがわかってホッとはしたが、同じ年頃の娘を持つ身としてはたいへん心臓にわるい冗談だ。だったら、こうして半狂乱になるのもしょうがないじゃないか。

急につかれがどつと押しよせてきた。普段はまるまるしているダンゴムシだつてつかれればげつそりとする。実際、親戚のワラジムシくんとまではいかになくても、今のぼくは万年暗い森のおくに引きこもってるコシビロダンゴムシくんくらい小さく見えるんじゃないだろうか。

そんなことを気まぐれに考えはじめたぼくの目の前で、ネリちゃんは片手をサロペットデニムのポケットにつっこ

で、ごそごそとなにかをとり出していた。またあのま四角の紙切れだ。なにも現像されていないそのまっさらなフィルムを、ウコンさんの裏がわにさしこみ、ふたをしめる。

ネリちゃんは次に、ウコンさんのレンズをいかだのへりに向けた。カシュ、とわりと録音感まるだしなシャッター音がして、ネリちゃんはウコンさんの右がわについているねじを回していく。なんとなく、そのねじを回すことでカメラの中でフィルムが押しつぶされ、現像液が染み出るしくみになっていて、本来のポラロイドカメラが「ンベエ」とするのの代わりになっているんだろう、と察しがついた。

またウコンさんのふたをあけて、ネリちゃんはフィルムをとり出す。ぼくの目にくるいがなければ、そこにはいかだを組んでいる木の枝と、暗い川のおもて以外なにも写っていないはずだった。そんなものを撮ってなにを思ったのかネリちゃんは、現像されたてのその写真をしばらくまじまじとながめたあと、サロペットのポッケから小さなハサミをとり出して、ちよきんと切れこみを入れた。

途端、いかだがざぶんとゆれる。

あわてて全部の足をつっぱってから、きよろきよろと水

のうえを見わたした。流れが変わったとか、なにかにぶつかったとか、そういうことはしかなさそうだった。サカナがはねたのかもしれない。それはそれでヒヤリとするけれど、ゆれがすぐおさまったので安心しかけた。そのぼくの目に、信じられないものが飛びこんでくる。

このいかだにのり合わせている女の子が、一本の太いまっすぐな枝を持ちあげて、肩にかついでいた。枝の先にはみじかいツタが巻きついている。さらに女の子のいる近くから、する、と、枝三本分のほそながいいかだがどこかへ流されていった。ぼくらののっているいかだは、だいたいのその三本分のいかだより少し大きいくらいの面積がいつのまにかなくなって、それなりにせまくなっていた。

「な、な、なにしてんのおおおおおお!!」

「ごぐ」

ネリちゃんの回答はすこぶるシンプルだった。絶叫するぼくをしり目に枝を川につき立て、水をかきはじめる。何度かいきおいよく水をかいたけれど、放物線状の波紋は川の流れでかんとんにかき消され、いかだはピクリともしなかつた。

「たりない」

そうつぶやいたネリちゃんは、いったん枝を引きあげて、自分の肩に立てかけた。そうしてまたハサミとあの切れこみの入った写真をとり出すと、もう一本べつの切れこみを写真に加えた。

途端、ぶつんと小気味のいい音がして、いかだのはしの方の枝がはねあがる。またいかだが小さくゆれる。

はねあがった枝のはしつこには、みじかくなつたツタが巻きついていて、そのツタの断面は、なにかおそろしくすどい刃物で切られたようにしかぼくには見えなかった。

いかだから切りはなされた枝は、二本。流されてしまう前に、両方ともネリちゃんが拾いあげる。そのようすをぼくがあっけにとられて見ていると、彼女の首にストラップでぶらさがったポラロイド風カメラから、ネコをなでるような声がする。

「ネリちゃアーン？ ダンゴムシさんが写真を見せてもらいたいみたいよーオ？」

「へっ？」

ぼくは一瞬ひるんだみたいに裏返った声をあげかけた。

けれどネリちゃんは、いそいそと三本の枝をいったん全部足もとにおいて、ポッケにしまっていた写真を、なにもいわずにぼくにわたしてくれた。

写真はネリちゃんが切れこみを入れていたあの写真だ。

いかだをかたちづくる木の枝が写っていて、枝と枝とをつなぐじょうぶなツタがちょうどまんなかになっている。いかだでいうと写っているのは、ネリちゃんのいる近くのかどのあたりだった。写真のふたつの切れこみは、そのかどから数えてびったり四本目と五本目、そして六本目と七本目の枝のあいだに入って、ツタのうえにまで届いている。

そのツタは、ついさっき切りはなされた枝といかだをつないでいたもの。

とても信じがたいことだけど、写真の切った部分と、撮られたもののおんなじ部分が、まったくおんなじようになったのだとその写真はものがたっていた。写真のほうを切ることによって、まったくそのとおりに現実のほうも変化したのだ。

ふしぎな写真。ふしぎなカメラ。

ふしぎな子、ネリちゃん。

ぼくはまだ半信半疑のまま彼女を見つめた。

彼女はハサミを持っている。それでツタを切ったのではないか？

それにしてもハサミが小さすぎるなんてこともわかってはいたけれど、常識的にそう考えずにはいられなかった。

けれど、彼女を見ているうちに、なんとなく、ぼくの心は変わっていく。直感は確信に。うたぐりやとまどいは、じよじよにやすらかになってちぢんでいく。

ふしぎと。ふしぎなことに。

ネリちゃんは、いかだからとった三本の枝を一本にまとめて、もう一度川の中へつきこんでいた。今度はいかだがゆれるくらいの波がおこる。これならこげそうかも、と思っただけれど、三本にふえた枝は太くてもおもしろい、とネリちゃんが息を止めてふんばっても、さつき一本で水をかいていたときの半分のいきおひも出ないようすだった。

「クラアッ！ ぼんくらダンゴムシ！」

「うわあッ!？」

「うわあ!?! じゃないわよ！ 女の子がひとりでがんばってるのに、なアーにをボサーっとしとりますかーあ？」

「えええっは で、でも、ぼくらダンゴムシの足じゃ木の枝なんてつかめませんよ？」

「つかめるつかめないは問題じゃないでしょーお？ なんとかしようとするだけしてみせてみないよオ。誠意見せなさいヨオッ。イイ年のオトナなんでしょーオ？」

「むり。おもしろい」

ネリちゃんがいった。はやしたてていたウコンさんをだまらせるようなタイミングだったけれど、枝を水からあげながら、濃いむらさき色のひとみはぼくを見すえていた。

「おもしろい」

「え、ぼくが!?!」

「アー、なるほど。いかだ、プラス、ダンゴムシ、だとオ、おもしろい川の流れにのりすぎちゃうのね？ それで、ちよつとこいだぐらいじゃ流れを変えられない、と。つーまーりーい……いかだか！ ダンゴムシ、かッ！」

「ちよ、ちよ、ちよつと待ってくださいよ！ どうしてそういう二択になるんですか！ いかだが選ばれた場合ぼくはどうなるんですか!?!」

「そりゃー、おサカナさんのゴハンだよ」

「さも当然のようにこたえないでくださいよ！ ぼくだつてかえりたいんですよ!」

「エエーッ、かえりたいのオー?」

「なんでそんな『チッ、コイツ空気読めよ』みたいなニュアンスで不満そうなんですか! あたりまえでしょう! ぼくはかえりたいんです!」

「どうして?」

それは、非常識な問いかけには聞こえなかった。

ネリちゃんだったから。ネリちゃんのあの声だったから。耳のおくで鳴って、心のおくへひびく声。

まるでぼくのあたまの中にネリちゃんがいる、その彼女がぼくに語りかけてくるような声だった。いやおうもなく、ひとつひとつの音にまで意味があるように思えてしまう。

だからだろうか。ぼくはかたずをのんで、少しのあいだ待ちかまえていた。

彼女がもう一度問うまで。ふしぎなことに。

「どうして、かえりたいの?」

それは、「約束も、ないのに」
いかにくちやいけないからだ。

「どこへいくの?」

あの場所。咲く場所。

どうして?

いかにくちやいけないのに、どうして。

いく場所は、あの場所、じゃないのか?

あの場所、から、ぼくは、

逃げ出したかったのか?

「え……?」

す、とネリちゃんが枝の一本を持ちあげて、それでおくを指した。それはいかだの進む先。そちらに見れば、川の流れるとある場所からぱったりととだえて、その先にはとおくの景色だけが広がっていた。それがどういふことか、ようやく考えおわったとき、ぼくはわれに返り、同時にサーと体の底から芯までがいつぺんに冷えこんでいった。

滝だ。

「アッチャあー。こりゃー海に出ないままばけて出るはめになりそうねーエ」

「むりやりおもしろい感じにいわなくていいですよ！ なんてそんな冷静口調なんですか！」

「そんなもん、たすかる道が見えてるからに決まってるでしょーが。ホーラ、ネリちゃんっ、やって☆やれいっ★」
枝を一本にへらしてビリヤードのキューのように持ちかまえるネリちゃん。ねらいはぼくにさだまっていた。一瞬まさかと思っただけ、そのまさかで、彼女はまったくもってウコンさんのいいなりだった。

このままだと、ぼくはいかだからつき落とされる。

心のどこかではまだ、ネリちゃんのような女の子がそんなことをするはずがないと思いついていた。けれど、よくよく考えなおしてみれば、ぼくは彼女のことをなにも知らないのだった。ふしぎな子。理不尽な子。しいて知っていることといえ、首からさげたトイカメラのウコンさんのいうことにはとても従順なこと。それはつまり、とても純粹——善悪の判断もつかなくらいに、純粹だということなんじゃないか？ しゃべるカメラの心ない指示にもうたがう心を持たず、したがってしまふ。無垢むくで。無辜むこの。

「カエリタイ？」

まるでおどしかけ、尋問の果てに最後の選択をせまるように、ネリちゃんはぼくに問うた。ぼくは、ハツとしなかつた。この期におよんで、ぼくには彼女が、純真無垢な少女として見えてしかたなかったのだ。

かえりたい。陸おかへもどりたい。もどって、でも、それで？

「どこへ？ どこへかえるの？」

どこへ？

どこへも。

かえる？

あの場所、咲く場所。

小さな花の待つ場所。あの場所。

かえる場所？

ちがう。ぼくは、

「ぼくは……逃げたい」

こたえる。

逃げたい。どこかへ。ひたすら。

「ぼくは、逃げるためにここにきたんだ」

どこかとおくへ。

いかだにのって、川をわたり、岸へつけ、陸おかをのぼり、

とおくへ、はるかとおくへ。

あの場所、待つ場所から。

いかになくちやいけない場所から。

そうだ、ただ、けれど、

「だから——」

「いかないの？」

声がこもる。

目の前には女の子。

小さな手足。赤みのさす肌。さらさらの髪。

似てはいない。けして似てはいないけれど、同じだ。

待つ花と。あの場所で。咲く場所で。

「ぼくは……」

「いかになくて、」

——いいの？

時間が止まるみたいだった。ぼくら以外のすべての時間が、止まって、過去も未来もなくなって、まっ白になっていくみたいだ。

逃げたい。ぼくはあの場所から逃げていきたい。けれど、

「よくない……よくないよ！」

いいわけがない。

いかになくていいわけがないから、いかになくちゃ。

あの場所。待つ場所。

今も咲いている、あの小さな花のいる場所へ。

だって、ぼくは、

「だってぼくは、あの子の……!!」

ごん、と、突然あたまをつかれた。

体がふわりと浮く。足がいかだをはなれ、全部うしろへ、

あおむけにひっくり返りながら、倒れていく。

くるり。ざぶん。

ぼくは川に落ちた。甲殻におおわれた背中がわから。

「そ、そんなっ、ごぼぶっ……!!」

おぼれる！

水のみながらそのことだけはとても鮮明に意識できて、けれどもう、どうすることもできなかった。たくさんある足をじたばた動かしても、あおむけのままではなにもできやしない。ダンゴムシだから。とっさに体をまるめそうに

なったけれど、水の抵抗がへれば浮力もへってしずんでしまうのが直感でわかった。まだ空気が吸える。ぼくは必死で、とっさに逆に体をのばすことで、水に浮かぼうとした。再三バカにしてきた、あの親戚のワラジムシくんをイメー

ジした。そのぼくのやわらかいおなかのうえに、ふわりとかるやかに、けれどたしかなおもみを持ったなにかが着地する。

あたまだけ少しまげると、ひらりとゆれるうすいオレンジ色のポニーテールが見えた。

「つて、えええええ!! なななにしばらくぼぼ……!!」

「こぐ」

びっくりしてふたたびまるめそうになった体を死にもぐるいでピンともどして、もう一度おなかのうえの少女を見なおす。

彼女はそこに、どこか悠然としたものごしで立っていた。小さな両手でまとめてにぎりしめた二本の木の枝を、立ったままおもむろに川の中へさしこむ。

そうして息を止めていきおいよく水を切ると、ぼくの体の向きが変わった。

流されていく方向もじよじよに変わる。あたまを水面のほうにもどすと、まっすぐ川原の方を向いているのがわかって、ぼくは息をのんだ。

「オッホーウ! ウコンちゃん大でんさーい! ダンゴムシボート楕円形だからこぎやすいわア」

「ウコンさん!!」

「なアーによ、その声えー。ゼンツゼン期待してなかったって感じじゃナイ。しなさいよねエ、カ・ン・シヤ☆ しがないセツソクドウブツふぜいに生きるよろこびと希望をあたえ——」

「き、期待どころか、排除する気まんまんにか見えませんでしたよ!」

「そりやまさか浮かぶとは思ってなかったしいー?★」

「まさか」って聞こえたんですけど!! 今「まさか」っていいませんでした!」

「ウルチャーイ! ネリちゃんに飛びのれなんていつてなかったんだかんね! わめくより先にすることがあるでしよーがヨオー!」

ネリちゃんが?

無垢な子だと思っていた。ぼくのようなダンゴムシのいっぴきやにひき、つき落とせといわれたのなら、つき落とすことも思わないような。

実際のところ、ぼくはたしかにあのいかだよりいくらか軽いはずだろうけど、かたちも大きさも水に浮かぶには少々不安定だ。それを知らずにぼくに飛びのつたにしても、ネリちゃんにはまったくためらいがなかったように思える。

ふしぎな子。なにもものもおおそれず、とらわれない子。

けれど、やさしさはひとのみ以上、なのかもしれない。

「……とおい」

そのネリちゃんが、手を止めないながらもそうぼやいた。

その声にハツとして、ぼくはもう一度水面のほうを見る。

ネリちゃんが枝で水を切るたび、川原は確実に近づいてきていた。しかし、同時にぼくらは常に流されてもいる。

こころなしの流れは速まり、まだまだ距離があるように見えていた川の切れ目が、いつしか目とはなの先にせまりつつあった。ネリちゃんがペースを落とさなければギリギリで滝より先に川原へたどりつけそうにも思える。けれど、

「まにあわない」

ぼくの子測はただの願いだ。根拠もなくそう思い知らされるほど、ネリちゃんの宣告は冷静で、彼女特有の真実味をおびていた。

にもかかわらず、ネリちゃんは今ぐ手を止めない。けれど表情を変えそうになかった彼女のまゆが八の字にかたむき、さくら色の頬がまっ赤になっていくのが見える。

こんなときに限ってウコンさんはだまっている。

なぜだまっているのだろう。あれだけえらそうなことばかりいっておきながら、どうして今ネリちゃんを応援してあげないんだ。

そう思いかけて、ぼくは気づいた。

ぼくは今、がっかりしていた。ウコンさんがだまりこくってしまったことで、ぼくは期待を裏切られたような気持ちになつていたので。

自分がなにもできないのを棚にあげて、ほかの誰かが自分のしたいことを代わりにしてくれるのをひたすら待つのぞんでいた。

ネリちゃんが、あんな子どもが今、こんなにもがんばっているのに。

ぼくはダンゴムシ。いえす、ダンゴムシ。泳げない。浮かんではいるだけ。川の中で。それでも、ぼくはオトナのダンゴムシだ。

「——ツエイツ!!」

河原まであと少しというところで、ぼくらは先に滝のほうへさしかかった。

その直前、ぼくはぼくの体を思いきりまるめたのだ。

おなかのうえにのっていたネリちゃんとうコンさんは、そのいきおいではねあげられ、うまく川原の方へ飛んでいった。飛距離もじゆうぶん。かなりあらっぽかったのだ、ケガがないかどうか心配だ。ウコンさんなんかは、「修理保障外なのになにしてくれてんのよー!」とかなんとか、ガミガミうるさくいつてきそうだけれど、残念だな。ぼくは、ふたりにおこられる機会を永久にうしなってしまった。けれど、べつにかまわない。

いかにくちやいけない場所に、いけなくなってしまったけれど。

最初から逃げるつもりだったんだから、これはこれではればれとしている。

水面からほうり出される。宙をまう。

くるくる。空と地面。滝つぼと川。

くるくる。くるくる。まわりながら落下がはじまる。

ひらりと、なにかがぼくより高いところを飛んでいた。

白い、木の葉みたいなもの。

強くふいた風に流されて、落ちていくぼくに追いついて。

ちようど目の前に運ばれてきたそれは、あのふしぎな少女が撮ったパラロイド写真。写っていたのは、いっぴきの

大きなダンゴムシ。

存外に、ひよわそうではなかった。

くるくる。ぎぶん。



目をあげると、肩とか背中とかの痛みがいつぺんにおそつてきて、いったん目をとじざるをえなかった。最初の大波をこらえると、今度は体のあちこちで小さな痛みがつづくようになる。ジンジンとか、チクチクとか。

ずいぶんへんなかつこうでぼくは倒れていた。あおむけで、背中が中途半端に壁かなにかへもたれかかっている。同じところへあたまもぶつめたんだろう。首のうしろが一番ズキズキとしていた。片足は投げ出されて、もう片方の足はカーペットの下へもぐりこんでいる。きわめつけは、あおむけなのに右手がおしりの下にあつたこと。

自宅の居間だった。板じきのすみっこにぼくは倒れて、今まで気絶していたらしい。テレビの向かいがわだから、背中にあるのはミニクローゼット。いやはや。自宅でころぶなんて、急に貧血でもおこしたのだろうか。いや、そういえば、カーペットが新調したばかりですべりやすくなっていた。気絶する前はよく思い出せないけれど、片足だけでカーペットをめくりあげているところを見ると、

どうやらそういうことらしい。こうならないように気をつけなさいと娘にいつておきながら、なんともまぬけな話だ。

そういえば、もう幼稚園の終わる時間じゃないか？

ぼくはまだ、通勤用のワイシャツとジャケットを着たままだった。テレビのうえの時計をたしかめると、思ったとおり、夕方の五時になろうとしている。早びけでうちに帰つてきて、それからすぐの記憶があいまいだった。少なくとも一時間くらいは気を失っていたらしい。

とりあえず、急いでむかえにいかなくちゃあいけない。服はくちやくちやでしようがないが、ケガの方はたいしたことになさそうだ。そう思つてまず、おしりの下の右手を引き抜こうとしたときだ。そのさらに下に、なにかゴツゴツとしたものをしていることに気がついた。

まさか、花びんでも押しつぶしたんじゃないだろうか？

ヒヤリとして、おそるおそる慎重に右手を引っこ抜く。おしりは少し浮かせたままにして、ひりひりしている右手を目の前に持つてきて、そこでまゆをひそめた。

ぼくの手のひらには、見なれない変なカスみたいなのがいっぱいついていて、発泡スチロールのつぶに似ている

けれど、あれよりもかたく、かたちもいびつで、大きさもバラバラだった。なにより色が奇妙だ。青やみどり、黒や白がいりみだれ、黄色やオレンジも少しまじっている。そういえば、かたまつた絵の具みたいだけれど……絵の具？
そこでようやくぼくは気がついた。本当の意味で目が覚めたという替えてもいい。

両手を床にたたきつけるようにして飛び起きた。頭痛がひどくなつてくらくらしたけれど、ふりはらうように体をひねって腹ばいになろうとした。足で巻きこんだカーペットがじゃまだつた。力ずくで引っこ抜いたひょうしに、近くにあった一人用のソファが倒れ、ローテーブルが動いた。ぼくはそれらをまつたく気にかげず、ただぼくが今まで下にしていたものを凝視する。

思ったとおりだ。それは紙粘土でできたジオラマが、かぶなきまでにこわされたあとの残骸だった。四角いダンボールの土台のうえに、緑にぬられたふたつの陸^{おか}があり、その間をまがりくねった青い川が流れている。川のまわりには、小指のツメくらい石や、ドングリやクローバー。ひとときわ川はばの広がったところには、小枝でつくった

いかだが浮かんでいる。それらは紙粘土ではなく本物。遠足でいったハイキングのとちゅうで拾い集めたものたち。

そしていかだのそばに、あれがいた。

紙粘土を真つ黒にぬつてつくられた、親指くらいの太さのダンゴムシ。

ほかの子どもたちが実物を見て気持ちわるがる中、ひとりだけ石の下のこのムシを探して、見つけるととてもよろこんで、ぼくのところまで持ってきてくれていた。

あの子のいちばん好きなムシ。

ついさっきまでまるまるとしてたくましかったはずのそいつは、ころんだぼくの下じきとなつて、ほかのいろいろな作品たちと同様、ボロボロにくだけてしまっていた。

こわしてしまった。あの子のジオラマを。あの子がつくつたというだけじゃない。このジオラマは、ぼくがあの子と父の日にいった遠足の記念につくってくれたもの。あの子からの、はじめての父の日のプレゼント。

どうしよう？ ぼくはぼくに問うた。ずっと前から同じことを、ぼくはぼくに問うていたような気がする。きつと、気絶する以前から。ころぶ寸前に服のすそを引っかけて、

ミニクローゼットのうえにおいていたジオラマを落としてしまった。それに気を取られたひょうしにカーペットで足をすべらせて、ぼくのおしりはジオラマのうえに落ちた。ぼくにはその自覚があったのだ。

だから、あんな夢を見た――

ハッとした。いや、どんな夢だったかは思い出せない。

でも、たしかにぼくは夢を見ていた。気絶しているあいだじゆう、夢の中でなにかと戦っていた。

逃げ出したい。このままあの子をむかえにいかなければ、それですむ。このだいたいな時期にそんなことをすれば、あの子の親権をなくすことにもつながりかねない。だからって、ぼくにどうすることができるといふんだ。あの子との大切な思い出をこわしてしまった。あの子になんてあやまれば、許してもらえないだろうか。もうむりだ。ぼくは父親失格だ。最初からむりだったんだ。ぼくひとりであの子を育てるなんて。土台、荷がおもすぎた。

かえりたい。あの頃に、かえりたい。ふたりではなく、さんになでわらっていられた、あの頃に。

だけど、

「……いかなくちやいけない」

ぼくはうなだれたまま、呪文のようにそうつぶやいていた。「いかなくちや」心でとなえて、口にも出すたび、あたまの中にひびいてくる声があった。まるでそこにいるかのように、うちがわにひびく声。

いかなくて、いいの？

「いいわけが、ないんだっ」

ひとときわ声をはって、ぼくは顔をあげた。

目の前の紙粘土の残骸をていねいにていねいに拾い集めて、そっとテーブルのうえにおく。

ぼくは許されないかもしれない。きつと泣かせてしまふ。あしたもあさっても、あの子は口をきいてくれないだろう。

それでも、いい年のおとなだから、ぼくは。

絵の具まみれのスラックスのまま、リビングを飛び出す。運転席のシートはひどいことになるだろう。

おまけに遅刻が確定していた。



くるくる。ざぶん。

流れ、流されていく。

清流のまま。時とともにあの場所はおさかる。

あの場所。咲く場所。

約束の場所。

流れ、流される。清流のまま。いかだのうえ。

女の子がひとり。

ひとりぼっち。カメラをかかえて。

「でエ、どオーしていつのまにか自由研究のテーマが、『ダムゴムシのかんさつにつき』から『けいりゆうくだり』になってるわけ？」

ポラロイド風のカメラがたずねる。

レモンイエローのトイカメラ。

デジタルだけど、おもちゃのカメラ。ホシヨウギレ。

「……ふうん。ま、いーけどサー」

いかだのうえ。

ねころがって、ノートをひろげ、絵ふでを動かす。

青い絵の具で川を。みどりの絵の具で山を。

川の真ん中には、写真の切り抜き。ポラロイドのフィルムからじょうずに切り出した、黒くてつよそうな彼の姿。

「いーんだけどサー？ でもぜえーったい、ダムゴムシ川に流してゴーモンしました、にしか見えないぞお、ソレ」

いーけどサー。いーんだけどサー。

ぶつくさ、ぶつくさ。ふきげんなカメラ。

その下じきにも、いちまいの写真。まるい顔の女の子と、男のひと。おそろいのハイキングハット。なかよく石の下をながめるツーショット。

いーけどサー。いーんだけどサー。

ぶつくさ。ひよこひよこ。

ちっちゃなポニーテールが風にゆれている。

青い空の下。木々のアーチをくぐり。

カメラとふたり。けいりゆうくだり。

くるくる。ざぶん。

なつやすみの、おわり。

月刊缶じうす学祭号 通巻192号
2013年 10月22日発行

編集人 芹沢一 千歳緑 前崎一成

印刷所 広島大学文団BOX